

【研究ノート】

## 北方モン・クメール民族における鶏の文化的位置づけ

—言語にたどる民俗分類—

山田 敦士

### 0. はじめに

2003年、鶏と人の関係の多面的かつ総合的な研究の構築を目的として、日本とタイ国の様々な分野の研究者が参加した国際共同研究計画 Human-Chicken Multi-Relationships Research Project—H.I.H. Prince Akishino Research Project under the Royal Patronage of H.R.H. Princess Maha Chakri Sirindhorn—(通称 HCMR 秋篠宮研究プロジェクト)が発足した。この研究プロジェクトは、家禽資源研究会による野鶏の「家禽化 (domestication)」にかんする調査研究を引き継ぐかたちでおこなわれており、特に鶏を生物としてではなく、人間の生活の中で作り出されてきた生き物、つまり文化的所産であるとする点を重要なコンセプトとしている。

今でこそ世界中でさまざまな色・形状の鶏が飼育されているものの、これらはもちろん最初から人間の生活圏に存在していたわけではない。鶏(家鶏)の先祖である野鶏が何らかの理由により家禽化され、その後の品種の分化などを経て、今日に至っているのである。秋篠宮(2000b)によると、世界には赤色野鶏、灰色野鶏、セイロン野鶏、緑色野鶏という4つの野鶏種が存在するものの、このうちのどの種が家禽化に関与したのかについては、単元説と多元説があり、未だ結論には至っていないという。ただ、著者自身によるミトコンドリア DNA を用いた研究では、赤色野鶏のみが鶏(家鶏)の直接の先祖であるという結果が出されている。ここで興味深いと思われるのは、いくつか存在するとされる赤色野鶏の亜種のうち、ある特定の亜種のみが家禽化されたのではなく、同一亜種であっても家禽化されたものとされなかったものがあるということである。言い換えれば、むしろ地域的な要因が重要であるという指摘がなされたのである。そしてこの家禽化がおこなわれたと推測されるのが、中国西南部からラオス、ベトナム、タイ北部にいたる地域である。

筆者はこれまでこの家禽化想定地域において、モン・クメール諸民族の言語文化にかんする調査研究をおこなってきた。以下では、民族言語研究の立場からのHCMR秋篠宮プロジェクトへのアプローチについて述べ、その一つの事例として、筆者自身の調査によって得られたデータをもとに、北方モン・クメール民族のうち特にパラウク・ワ族の言語にみられる鶏の文化的位置づけについて若干の考察をおこなう。

### 1. 民族言語学的アプローチ

先述のように、野鶏から家鶏への家禽化というプロセスは、生物学的な分化がその根本要因であったわけではない。人々が野鶏を、何らかの文化的理由によって、自らの生活空間に取り込んでいったというのが我々の作業仮説である。このように家鶏が文化的所産であるとすれば、当該民族の世界観を映し出す鏡ともいえる言語に民俗分類 (folk taxonomy) を見出すことも可能にはずである。

言語において民俗分類がもっとも顕著に表れるのは語彙部門だと思われる。語彙の体系を調べることによって、当の民族が生み出してきた文化、集団として抱えてきた興味や価値判断などについて、さまざまに推し量ることが可能になる。また語彙の分布をみることで、他民族と

の接触など歴史的経緯を知ることもできるかもしれない。語彙体系から民俗分類を見出す一方策として、本研究プロジェクトにおいては、鶏と牛、豚にかんして、野生対飼育、性別、成長段階（卵、子供、親、老齢など）、社会的役割（去勢したもの、オトリなど）、色、類別詞（＝助数詞）、飼育や猟にかかわる道具（罾、飼育小屋など）、動詞との関係（鳴く、殺すなど）の項目を聞き取ることにした<sup>2</sup>。また同時に、鶏の身体図を示しながら、各部位に対する呼称についての調査もおこなう。ここで鶏に加え、特に豚と牛をパラダイムとして挙げるのは、当地の人々にとって身近だと思われる動物について調べ、これらを対比させることによって、鶏にかんする認識が浮き彫りになるからである。民族言語学の立場からの研究は「家禽化」という問題を直接解決に導く性質のものではないが、当該民族の鶏に対する認識を目にみえる形で提示できる利点がある。この手法によって収集されたデータをもとに、Shintani（2005）では、タイ国のアカ族における家鶏と野鶏に関する心理的距離が、豚と猪に関するそれよりも大きいことを実証している。これを一つのモデルとしつつ、より多くの事例を提示できるように、データの収集に努めているところである。

## 2. 北方モン・クメール民族の事例から

以下では、筆者自身がおこなってきた調査資料から、特に中国雲南省、シャーン州（ミャンマー）および北タイに分布するパラウク・ワの事例を取り上げ、収集されたデータから、鶏に関連する民俗分類について予備的な分析をおこなう。

### 2.1 言語にみる民俗分類

表1は、調査で得られたパラウク・ワ語における鶏および豚、牛にかんする語彙データの一部である<sup>3</sup>。

#### 2.1.1 野生対飼育

表1にみるように、一般に【鶏】をさす形式は?iaであり、【野鶏】との別を特に強調したい場合のみyaun【村】を後続させる。つまり、?iaが無標形（unmarked form）であり、?ia yaunは有標形（marked form）である。したがって、?ia yaun【家鶏】と対立する?ia prai?2、?ia tiak2（ともに【野鶏】）は?iaと同等のレベルに位置するのではなく、?iaの一段下のレベルに位置づけられているということである。これに対し、【豚】は飼育されたものがlik2、野生のものがpreh2であり、ここでは野生対飼育で形式が異なっている。家畜としての【豚】を\*lik2 yaun【豚+村】のような形式で表わすこともないので、lik2【豚】とpreh2【野豚（猪）】は同じレベルで対立していることになる。このことから、パラウク・ワ語においては、【家鶏】と【野鶏】との心理的距離よりも【家豚】と【野豚（猪）】との心理的距離のほうが大きいことがみてとれる<sup>4</sup>。

ところで、日本語や漢語では【野鶏】との対比で鶏を述べようとする場合、どちらも【家鶏】すなわち「家にいる鶏」として認識している。これに対し、パラウク・ワ語においては、?ia yaun【鶏+村】つまり「村にいる鶏」と認識されており、【鶏】?iaと【家】je?2の結合は許されない。これは【鶏】を家の一部で囲って飼育しているのではなく、放し飼いに近い形で飼育されている事実を反映しているのかもしれない<sup>5</sup>。

表 1

パラウク・ワ語	和 訳	パラウク・ワ語	和 訳
ʔia (yaun)	鶏 (家鶏)	lik2	豚
ʔia praiʔ2	赤色野鶏	preh2	野豚 (猪)
ʔia tiak2	赤色野鶏	kɔn lik2	子豚
ʔia cɔ2	雉 (?)	lik2 tiŋ2	成豚
tɔm (ʔia)	卵	lik2 reʔ2, lik2 kuat2	老豚
kɔn ʔia	ひよこ	lik2 ŋ <sup>h</sup> a	雄豚
ʔia tiŋ2	成鶏	lik2 meʔ2, meʔ2 lik2	雌豚
ʔia reʔ2, ʔia kuat2	老鶏	lik2 siaŋ	出産前の豚 (♀)
ʔia simeʔ2	雄鶏	lik2 meʔ2, meʔ2 lik2	子連れ豚 (♀)
ʔia meʔ2, meʔ2 ʔia	雌鶏	lik2 seh	去勢豚 (♂♀)
ʔia siaŋ	産卵前の鶏 (♀)	lik2/preh2 tiʔ2 mu	豚／野豚一頭
ʔia meʔ2, meʔ2 ʔia	子連れ鶏 (♀)	lik2/preh2 tiʔ2 meʔ2	雌豚と子豚一群
ʔia seh	去勢鶏 (♂)	mɔi2	赤牛 (コブウシ)
ʔia klale2	去勢失敗鶏 (♂)	krak	水牛
ʔia tɔ	オトリ鶏	(該当する形式なし)	野赤牛／野水牛
(該当する形式なし)	種鶏	kɔn mɔi2	子牛
(該当する形式なし)	闘鶏	mɔi2 tiŋ2	成牛
ʔia giʔ2	チャボ (?)	mɔi2 reʔ2, mɔi2 kuat2	老牛
ʔia pain2	白鶏	mɔi2 ŋ <sup>h</sup> a	雄牛
ʔia luŋ2	黒鶏	mɔi2 meʔ2, meʔ2 mɔi2	雌牛
ʔia sigrak	赤鶏 (特に斑色)	mɔi2 siaŋ	出産前の牛 (♀)
ʔia tiʔ2 mu	鶏一羽	mɔi2 meʔ2, meʔ2 mɔi2	子連れ牛 (♀)
ʔia praiʔ2/tiak2 tiʔ2 mu	野鶏一羽	mɔi2 seh	去勢牛 (♂)
ʔia tiʔ2 meʔ2	雌鶏とひよこ一群	mɔi2/krak tiʔ2 mu	赤牛／水牛一頭
tɔm (ʔia) tiʔ2 mu	卵一個	mɔi2 tiʔ2 meʔ2	雌牛と子牛一群

パラウク・ワ語欄の ( ) は括弧内の要素が必須項目でないことを表わす。  
複数個の名称があるものは、どちらも可能であることを表わす。

収集したデータにおいては、「野鶏」に2種類の形式 (ʔia praiʔ2, ʔia tiak2) が確認されている。praiʔ2 は【(内に対し) 外】、tiak2 は【開墾地 (村落・田畑) 以外の場所】の基本的意味をもつ語である。聞き取りの範囲では、ʔia praiʔ2 と ʔia tiak2 の間に有意な差を見つけることができず、むしろ個人の好みのような傾向がみられた。ただし、もともと【野鶏】というものの何らかの特徴に基づき民俗分類がなされていた可能性もあるので、慎重に調査しなければならない。

### 2.1.2 成長段階との関係

鶏の成長段階に応じて異なる名称が用いられるという状況は、当地の様々な民族でみられる

(秋篠宮・高田 2000: 79-108)。パラウク・ワ語の場合、産卵に至らないものと産卵を始めたもので雌のみ呼び方が変わる。sianj という形式は、?ia【鶏】に後続して複合語?ia sianj【産卵前の雌鶏】を形成するほか、lik2【豚】やmoi2【赤牛】に後続し、lik2 sianj【未出産の豚】、moi2 sianj【未出産の牛】という意味も表わしうる。sianj 単独では【宝物、大切なもの】の意味を表わすので、?ia sianj【産卵前の雌鶏】などもこの意味との関連が予想される。これはつまり雄の子と雌の子に対する関心が同じではなく、子孫（子供、卵）を産む雌を重視する認識が反映されているといえるだろう。

成長段階とのかかわりで気になるのは、?ia re?2【老鶏】という複合語の内部構成である。人間が老齢となった場合、通常はkuat2【年をとった】という別の形式が用いられるが、鶏をはじめ、豚や牛などはre?2【(道具、食物が)古い】との結合によっても複合語が構成される。このよう構成法をみると、【鶏】、【豚】や【牛】などが生物というより道具、食物といった「もの」として認識されているとみることができるかもしれない。

### 2.1.3 性別との関係

鶏の性別に関して、【雄鶏】は?ia sime?2、【雌鶏】は?ia me?2 あるいはme?2 ?iaである。このうち複合語の【鶏】?ia以外の部分について、sime?2 は【男】とme?2【母】であり、両者は対義的ではない。sime?2【男】はbun【女】、me?2【母】はkuiŋ【父】と対になるが、それぞれ\*?ia bunや\*?ia kuiŋ、\*kuiŋ ?iaなどとすることはできない。つまり【雄鶏】に関しては性(sex)による名付けがなされている一方、【雌鶏】は親という視点から名付けがなされているのである。【雌鶏】を表すのに2つの言い方(?ia me?2【雌鶏：鶏+母(母である鶏)】me?2 ?ia【雌鶏：母+鶏(鶏の母)】)があることもこの分析を支持しているといえるだろう。

類別詞においてもこれと同様の傾向がみられる。【家鶏】と【野鶏】、また性別の如何にかかわらず、鶏が一羽いる場合はすべて?ia ti?2 mu【鶏一羽：鶏+1+羽(「羽」が類別詞)】という形式をとる。しかし、母鶏が複数のひよこを連れているような状況は、特に?ia ti?2 me?2【雌鶏とひよこ一群：鶏+1+母(「母」が類別詞)】という形式で表わすことができる。

ところで豚や牛についてであるが、雌に関しては鶏の場合と同様、me?2【母】との複合形式によって【雌豚】、【雄牛】を表わし、類別詞としてme?2【母】が用いられるといった特徴がみられる。これに対し、【雄豚】、【雄牛】は鶏のようにsime?2【男】との複合形式ではなく、それぞれlik2 ŋ<sup>h</sup>a、moi2 ŋ<sup>h</sup>aという形式が用いられる(逆に?ia ŋ<sup>h</sup>aの成否については個人差が認められた)。これについてはさらなる調査が必要であろうが、lik2 ŋ<sup>h</sup>a、moi2 ŋ<sup>h</sup>aは一方で種付け用という意味合いがあったという情報もあり、あるいはこのことと何か関係があるのかもしれない。

性別と関連して、?ia seh【去勢鶏】はseh ?ia sime?2【去勢する、鶏+男】とすることが(やや冗長な感じがするらしいが)できる。ところが\*seh ?ia me?2【去勢する、鶏+母】や\*seh me?2 ?ia【去勢する、母+鶏】などは全く許されない形式である。すなわち、言語だけから判断すると、パラウク・ワ族においては、去勢をほどこすのは雄に限られるということになる<sup>6</sup>。またこれと同様に、?ia klale2【去勢に失敗した鶏：鶏+(不明)】も雄に限定された言い方である。

### 2.1.4 入れ物との関係

鶏自体に関する語彙を収集すると平行して、その関連事項に対する調査も欠かせないだろう

う。例えば、漢語（北京官話）においては、【猫】と【鶏】が“只(zhǐ)”、【牛】や【馬】は“頭(tóu)”という異なったカテゴリーとして認識されている。日本語では【猫】は“匹”、【鶏】は“羽”という漢語と異なるカテゴリーによって分類されている。このように、パラウク・ワ語においても、類別詞に民俗分類がみられることが期待されたが、【家鶏】も【野鶏】も、さらに【豚】や【牛】にいたるまですべて同一の類別詞mu【個、頭】が用いられることがわかった。しかし、さらに調査をすすめると、普通名詞を類別詞に援用するということがみられた。これに関して特に注目したいのは、様々な入れ物を表わす名詞を鶏の類別詞として用いることがある点である。例えば、grɔ2【籠】、daŋ【囲い】などにより、ʔia tiʔ2 grɔ2【一籠の鶏：鶏+1+籠（「籠」が類別詞）】、ʔia tiʔ2 daŋ【一囲いの鶏：鶏+1+囲い（「囲い」が類別詞）】というような集合的存在を表わすことができる。

入れ物との結合が可能ということは、実際にそのような生活体験があるということである。実際に【籠】に入れないのならばʔia tiʔ2 grɔ2【一籠の鶏：鶏+1+籠（「籠」が類別詞）】のような言い方をすることはないと思われる。どのような入れ物との結合が可能かということをもっと詳細に聞き取り、これに流通や売買といった経済的観点からの研究成果と併せれば、面白い見解を見出すことができるかもしれない。

### 2.1.5 並列法 (parallelism) の観点から

パラウク・ワ語においては、語形成ほか文法の諸相において並列的手法 (parallelism)<sup>7</sup>による言語表現がおこなわれる。パラウク・ワ語では、例えば、k<sup>h</sup>aoʔ【木】とʔoʔ【竹】を直接連結させ、k<sup>h</sup>aoʔ-ʔoʔ【森林】という複合語を形成することができる。また、k<sup>h</sup>aoʔ【木】とʔoʔ【竹】それぞれにkak【枝】という語を連結させ、kak-k<sup>h</sup>aoʔ kak-ʔoʔ【枝という枝】という慣用的な句を形成することもできる。さらに一例挙げると、ma【焼畑】とkauŋ【水田】が、全体としてma-kauŋ【田畑】、dauʔ【中】と組み合わせられてdauʔ-ma dauʔ-kauŋ【田畑の中】という意味として用いられる。

動物に対しても同様に対句的に用いられる固定的な組合せがある。例えば、moi2【赤牛】とkrak【水牛】(moi2-krak【耕畜】)、bruŋ2【馬】とlɔ2【ロバ】(bruŋ2-lɔ2【運搬畜】)、soʔ【犬】とlik2【豚】(soʔ-lik2【(身近にいる)家畜】)などである。ʔia【鶏】に関しては、pet【アヒル】やkuut2【ウズラ】といった具体的な鳥の種類ではなく、常にsim【鳥】という生物学的には類を示す語と連用される(ʔia-sim【家禽】)。

「男・女」「雄・雌」のような本来的に2項対立的なものとはともかく、対句的に用いられる語句は往々にして固定的であり、これらは当該民族において何らかの意味で対立的に認識されていると考えられる。上述の動物に関していうならば、例えば収集した口頭伝承などにおいて、moi2【赤牛】とkrak【水牛】は「弱いもの」対「強いもの」、soʔ【犬】とlik2【豚】は「怠け者」対「働き者」といった対立的認識で語られている。ʔia【鶏】とsim【鳥】がどのような対立的認識でとらえられているか明らかでないが、このような対立的な組合せを調べることも当該民族による民俗分類を知る手がかりになるだろう。

### 2.1.6 小結

ここまでパラウク・ワ語における鶏とその周辺の語彙体系から、幾つかのトピックにわけて、民俗分類を読み取ることを試みた。未だデータ収集の段階にあり、ここから確たる結論を導くことは困難であるが、それでも全体としての傾向を見出すことはできる。パラウク・ワ語にお

いては、例えば、【老鶏】という複合語形成に際し、【(道具、食物が) 古い、使えない】を表わすreʔ2 という形式を用いること、またgry2【籠】、daŋ【囲い】のような入れ物にかんする名詞を鶏に対する類別詞として援用することなど、鶏を外界に存在する生物としてではなく、自らの生活圏内における道具や食品、商品として扱っていることがみてとれる。このほか、特に雌に着目した語彙の充実が目を引くが、これは、道具や食品、商品として認識される鶏のストック、言い換えれば、人々にとって将来的な資産となる卵、子孫を育むものを重視する態度であるとみることができよう。

### 3. おわりに

本稿では、鶏の家禽化という問題に対し、民族言語の立場から、言語体系から諸民族における鶏の文化的位置づけ(民俗分類)を見出すことを試みた。本稿の分析は全くの予備的なものであり、したがって上記のような考察はもちろん想像の域を出るものではない。今後はこのような結果を周辺領域の調査研究成果と突きあわせることで、何らかの統一の見解として昇華されるのが望ましい。

最後に、家禽化がなぜおこなわれたかということについて触れておきたい。この問題に対しては未だ確定的な回答が用意できるわけではないが、少なくとも「焼畑」と「狩猟」というのが重要なキーワードになることは間違いないようである。つまり「焼畑」という人間の生活と野鶏の生活が交錯する生態的な空間があり、そこで鶏と人間の出会いがおこった。そして鶏のほうから人間に近づいたか、人間が鶏に近づいた(「狩猟」を生業とする人々が何らかの理由でこれを捕獲、家禽化していった)というのが現時点で注目される一つのストーリーとなっている。そのため、本研究プロジェクトにとっては、焼畑や狩猟を営む山地民を対象とした研究が特に重要になってくるのである。これらの人々は一方で、儀礼、占い、カラーシンボリズム等において系統関係を超えた共通性をみせるのも興味深い<sup>8</sup>。大小様々な祭儀時に鶏を供儀物として用い、鶏の大腿骨、顎の骨、卵などを用いて吉凶を占う<sup>9</sup>。パラウク・ワ族の調査では、出産を終えたばかりの母親に鶏ばかりを食べさせるという習慣が認められたが、その際、決して白い鶏を用いることはない。これは系統を超えて諸民族にも広くみられる習慣である。このような諸特徴はなぜ共有されるに至ったか、これは鶏の家禽化という本研究プロジェクトの大命題にも直結する問題である。先に述べた家禽化が想定される地域というのは、モン・クメール系、チベット・ビルマ系、タイ系、ミャオ・ヤオ系、漢系など異なる言語系統に属する民族集団が複雑に分布する地域である。それぞれの民族集団は、異なる時期に当地へ順次進出してきたと推定されている。諸民族集団が高度分布(つまり生態環境)とある種の職業的な(つまり社会環境による)住み分けをおこなってきた。しかし、近年、政治的また経済的理由によってその住み分け状況に急激な変化がおきているのも事実である。民俗とは、歴史の化石ではなく、時代や場所に依じて常に変化するものである。あるいは「民族」という枠組み、「言語」という枠組みさえ指標にならないかもしれないため、調査対象の絞込みは慎重にならざるを得ない。やや迂遠なようではあるが、できるだけ多くの事例研究を蓄積すること、またたとえ同一の民族集団であっても、様々な地点において調査をおこなうことが重要である。これらを慎重に比較・対照していくというスタンスこそが重要なのだと思われる。

## [注]

- 1 本稿でパラウク・ワ族と呼ぶのは、中国雲南省西南部とミャンマーのシャン州を中心に居住するいわゆるワ族（ワ人）と呼ばれる人々のうち、パラウク（*parauk2*）と自称する集団である。パラウク・ワ族は北方モン・クメール民族の中でも人口・分布域ともに比較的大きな集団である。本稿で用いるデータは、タイ国チェンラーイ県および中国雲南省臨滄地区滄源（ワ）族自治州にて収集したものである。
- 2 新谷忠彦教授（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）の発案による。
- 3 本文中の表記は音韻表記を用いている。パラウク・ワ語においては、*lax* 音節か *tense* 音節かという音節弁別が重要で、それぞれ数字 2、無標で表わすことにする。音韻表記に関するその他詳細については省略する。また語頭に\*がついている場合、そのような言い方が存在しないことを表わす。
- 4 同じ雲南省内に分布する北部モン・クメール民族であっても、プラン族などでは【野豚（猪）】を【豚＋外】のような形式で表わす。
- 5 周辺諸民族の言語においても「村にいる鶏」という組み合わせであった。その一方で、タイ国で調査した同じ北部モン・クメール系民族のタイ・ロイ族においては、【鶏＋村】と【鶏＋家】の両形式が許容された。この調査地は移住によって、山住みの生活をやめている。これと極めて近い系統的關係にある中国雲南省西双版纳州のプラン族（山住み）では、【鶏＋村】のみ許容される形式であった。
- 6 すべての集団に対し調査をおこなったわけではないが、例えば北タイのアカ族、ラフ族などにおいては雄・雌の両方に対し【去勢する】という形式が結合しうるのである。なぜ民族集団ごと去勢をおこなう対象が異なるのかは現在のところ不明である。そもそも「去勢」を行うこと自体、高度な知識と技術が必要だと思われるので、語の分布（借用関係、雄雌との共起関係など）も含め、慎重に調査をすすめるなければならない。
- 7 相反または類似する 2 つの語句を対句的に用い、総体として一つの意味を表わす手法。
- 8 鶏をさまざまな儀礼の中で用い、鶏の骨や卵を用いた占いをおこない、また白い鶏を忌み嫌うという色にかんする志向性が諸民族に共通してみられる（秋道 2000:139-166 など）。
- 9 中国雲南省双江県のプラン族には、当地ダイ族の文字を用いた鶏占いの書も現存するようである。

## 参考文献

秋篠宮文仁 編

2000a 『鶏と人—民族生物学の視点から』 小学館

秋篠宮文仁

2000b 「鶏—家禽化のプロセス」秋篠宮文仁編『鶏と人—民族生物学の視点から』 pp.47-78

秋篠宮文仁・高田勝

2000 「家鶏と村人の生活」秋篠宮文仁編『鶏と人—民族生物学の視点から』 pp.79-108

秋道智彌

2000 「鶏占いと儀礼の世界」秋篠宮文仁編『鶏と人—民族生物学の視点から』 pp.139-166

新谷忠彦 編

1998 『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』 慶友社

Shintani, Tadahiko

2005 Akha concept of some domestic animals shown by its terminology. The 2005 HCMR Congress in Tokyo

(やまだ・あつし／北海道大学大学院)